

2005年9月30日

陳 述 書

小畑 精 和

私は明治大学政治経済学部教授の小畑精和（おばたよしかず）と申します。仏語系カナダを中心として現代文学を研究し、フランス語とカナダ文化研究という授業を担当しております。

都立大学の改組に関連する会合で、「フランス語は数を勘定できない言葉だから国際語として失格しているのも、むべなるかなという気がする。そういうものにしがみついている手合いが反対のための反対をしている。笑止千万だ。」との発言を昨秋石原慎太郎都知事がしたことについて、マリック・ベルカンヌ仏語学校校長らが損害賠償を求める予定である、との記事が今年の6月2日朝日新聞に掲載されました。

私はそれを読んで非常に驚き、また、悲しく思いました。このような誤解と悪意に満ちた発言を、フランス文学にも造詣が深いと聞く石原都知事がなさるとは考えられなかったからです。仏文関係者の同僚や友人たちとも話しましたが、信じられないとの声が多く聞かれました。

私はフランス文学から出発して近年ではカナダのフランス語で書かれた文学を研究しております。私が主に活動しており、役員もしている日本カナダ文学会の研究大会が6月11日（土）にちょうどあったので、他の役員の方々にこの件について知らせ、学会として何らかの対応を考えてもらうよう申し出たところ、役員会をへて、当日の総会で満場一致で公開質問状を提出することになりました。それを受けて、6月末に会長名で公開質問状が内容証明で郵送され、8月に再度質問状が出されています。

この間、知人・友人からこの件に関して、様々な情報を得ました。フランスの新聞ル・モンドでも報道され、フランス人やカナダ人の友人たちからも憤りの声をたくさん聞きました。そして、この発言がなされたビデオが流されていることなど詳細を知るにつれ、ますますフランス語に携わる者として、侮辱され、傷つけられた思いが募っていきました。ベルカンヌさんらが準備している訴訟に加わろうと、こうして考えるにいたりしました。

明らかな事実誤認に基づくこの種の発言を見過ごせないとの意見が、明治大学でフランス語を担当する教員の中でも強く、どのように意思表示をするべきか検討した結果、専任教員有志13名の連名で7月26日に事実認識を求めて都庁に要望書を提出いたしました。新聞・テレビなどマスコミ各社がニュースで取り上げてくれ、この問題に対する世間の関心の大きさを知り、また、勇気づけられもしました。

その要望書で、言語はそれを話す民族、文化、生活と密接に結びついていて、ある言語を誹謗中傷するのは、それに関わっている人全体に関わることであり、勘定の仕方を含めて、言語は多様であり、違いを認めることが国際理解の第一歩であることも申し添えました。

しかし、ベルカンヌさんたちからの公開質問状を含め、いずれにたいしても現在にいたるまで都知事からなんら回答はなされておらず、定例記者会見などで、フランス語に対して誤った発言をさらに積み重ねておられ、この発言を撤回なさる気持ちはまったくないようです。責任ある立場の人ですから、誤りは正して、範を示していただきたかったのですが、誠に残念でなりません。

言語にはそれぞれの論理があり、どれが優れているといったことはないはずです。国際語として一番広く使用されている英語にしても、11 (eleven)、12 (twelve)と変則的な勘定をします。しかし、13 (thirteen)、14 (fourteen)などにならって、11をoneteen、12をtwoteenにしるとは誰も言わないし、不便だとも思いません。慣れの問題であり、それ以上に文化の問題なのです。

各民族好き勝手にやればよいと私は主張しているわけではありません。お互いの文化を認め尊重することの大切さを述べているのです。数に関して言えば、数学的、算術的必要のあるとき、あるいは異文化間でのコミュニケーションの際には共通の数字があれば充分であり、現にそれで国際社会は動いています。

現代では万国共通で実際の計算は算用数字（アラビア数字）を使って行なっています。フランス語使用地域でも例外ではありません。日本でも漢数字を使って数学をする人はいないでしょう。言語はそれに対して、科学的合理性だけでなく、文化的背景を持っています。数学では「1、2、3、、、」で事足り、「一つ、二つ、、、」といった数え方は必要なくとも、日本人の生活や、文化にはそうした勘定の仕方が必要なのです。そしてそれは日本文化の豊かさの表れのひとつではないでしょうか。

数の勘定できない言語などありません。まして、フランス語は、国連や国際オリンピック委員会などの公用語であり、立派な国際語でもあります。さらに、フランス本国のみならず、様々な地域で使用されている言語です。「フランス語で数が勘定できない」わけはないし、「フランス語が国際語」であることは明らかです。

「フランス語は数を勘定できない言葉だから国際語として失格している」というのはある種の誇張として言われたのだとしても、そうした事実誤認に基づく発言が公の場で責任ある人からなされると、どのような影響を与え、どれだけ人を傷つけるものであるのか都知事はお考えになったことがあるのでしょうか。

都知事は、フランス語のクラスは閑古鳥が鳴いていて、学生がゼロに近いところもあるように述べられたようですが、都立大学でそのような事実はないそうです。私の所属する明治大学政治経済学部でも、中国語を外国語の単位として認めるようになって履修者が減ったのは事実ですが、一学年約1100名のうち今でも毎年およそ25%の学生がフランス語を履修しています。この数字はここ数年だいたい同じで、動いていません。他の学部、他の大学でも事情はだいたい同じようです。

都知事の発言を受けて、フランス語は難解で、国際社会で役に立たないから、学習する者が減っていると思ってしまう人は少なくありません。そうした先入観は、事実かどうかは問題ではなく、勝手に流布してしまうものです。また、そうした噂に付和雷同的に動かされてしまう人が多くいるのも事実でしょう。だからこそ、責任ある立場の者は、民衆に対して事実に基づいて行動する範を垂れるべく、責任ある言動をしなければなりません。個人でどう考えようと勝手でしょうが、都知事は人を誹謗中傷するような発言は慎むべきであり、重要な立場に伴う責任を石原都知事はもっと真摯に全うしていただきたいと存じます。

知事の発言による誤解を解くため、私は教室で無用な努力を強いられています。フランス語は国際語であること、数を勘定するのが難しいかどうかは慣れの問題であることを、強調して説明しなければなりません。間違った先入観を訂正するのはそう簡単なことではないのです。そのことを石原知事にぜひ分かっていただきたいと思っています。

また、私が専門とするカナダは「多文化主義」を掲げ、英語とフランス語を公用語とし、この二言語のみならず、先住民の言語、各移民の言語、それに基づく文化を互いに尊重することを社会の基に据えています。1999年には先住民イヌイットが多数派となる新しい準州(テリトリー)「ヌナヴット」を、北西準州から分離して、創設したことは記憶に新しいところでしょう。

そうしたカナダで、ケベック州を中心に全人口の約四分の一を占めるフランス系住民は、まさに「フランス語にしがみついて」自分たちの文化と伝統を守ってきました。多数派である英系住民もそれを認め、仏系住民を英語化せずに来ました。カナダ人はそうした寛容さを誇りにしています。石原都知事の発言はそうした人々の努力をも愚弄するものではないでしょうか。

「カナダ文化研究」という講義で、こうしたカナダ社会の文化を私は日頃から学生たちに教えています。カナダのような連邦国家はもとより、国際社会においても、違いを認め合うことが相互理解には不可欠だとも話しています。

都知事の発言は私のそうした教育研究を根底から侮辱するものであり、私は居た堪れない思いでおります。フランス語にしがみついてこなければ現在のケベックは存在しえず、私の教育・研究もありえません。知事は、ケベックの人がフランス語を捨て、カナダが多文化主義を放棄することを、まさか望んでいらっしゃるわけではないでしょう。そうであれば、あの発言はぜひとも撤回していただかねばなりません。

他方、フランス語の授業でも、フランス語をコミュニケーションの道具として身につけることのみならず、言語の多様性を学ぶことにより、人間の精神活動の大きな可能性を触発することを私は目指しています。

ヨーロッパ諸語における、男性名詞と女性名詞の区別、単数・複数の区別、人称や時制による動詞の活用など、日本人には複雑で難解に見える事項もそれぞれの「論理」が背景にあります。逆に日本語は丁寧語や擬音語(オノマトペ)に複雑な体系を持っています。日本人はそうした分野に繊細な感覚を持ち、それが日本文化のバックボーンになっているのでしょう。言語の数だけそうした論理・体系があるわけで、それは人間の精神活動の広がり・可能性を示唆するものでしょう。言語の多様性に触れることにより、われわれの知的活動はより活性化されるものです。他者に触発されることなくして、自己の発達はありえません。

言語や文化の優劣を論じることに意味はなく、それは無用な誤解と、差別を生むだけではないでしょうか。よそからとやかく言われて変えるのではなく、不都合があれば使用者が修正して、変化していく、それが生きた言語や文化でしょう。

フランス語を欠陥言語だとし、違いを認めようとせず、事実誤認に基づいて、「フランス語にしがみついている手合いが反対のための反対をする」といった都知事の発言に、私は非常に傷つけられました。間違いを認めずに、強弁を繰り返す知事の態度には憤りさえ感じるようになっております。

「そうしたものにしがみついている手合い」の一人といたしまして、この発言が石原都知事のような文学者、言語表現に携わる方からなされたことが、誠に残念でなりません。

繰り返しになりますが、石原都知事による誤解と悪意に満ちたフランス語蔑視発言により、フランス語にしがみついている私の名誉は大いに傷つけられました。また、多様性を認めることを基とするカナダ社会、特に仏語使用のカナダ文化を研究する者として、自分のしてきた教育・研究が全面否定された思いでおります。都知事という責任ある立場の方が公の場で行なった影響力から鑑みて、知事の発言により私が被った心の傷の深さ、知事の発言が引き起こす間違っただ先入観を是正するための労力は計り知れません。

どうか、事実を認め、発言を撤回し、謝罪していただきたいと存じます。

以上